

夜に香りを強める花

中村祥二（会長）

はじめに

暗くなると香りを強める花がある。その多くは夜目にも花がポッと白く浮き立って見えるものが多い。香りばかりでなく夜間活動する蛾などの昆虫に目立ちやすくする色を備えているのを感じる。ここでは4種類の花を選んでみた。

1 フウラン

（風蘭 *Neofinetia falcata*）

— 夜に香りを変える可憐な花

夏に白い花を咲かせるフウランを欧米のパフューマーに見せると、皆とても驚く。小さい可憐な花が拡散性のある強い甘い芳香を放つからである。

日本では本州の暖かい地方や、四国、九州に自生する。私の住む横浜では梅雨の終わり頃によく咲く。名前の通り風通しのよい枝に好んで着生する。ランの専門家によると柿の枝に吊すのがよいと勧められた。

蜜をためる距(spur)^{きよ}の長い独特の花の姿は夜間、香りと白の花色で蛾を誘引することがわかる。花自体の大きさは2 cmほどであるが、距の長さは5 cmにも及ぶ。半日陰の庭が好きな私の家のフウランは、昼間はさわやかでスズランとクチナシのイメージを持っているが、暗くなると次第に香りを強めてきて、甘さが次第に濃厚になりバニラとハニーサクルが加わった香りになってくる。主要香気成分はジャスミン系の成分とバニラの成分で、リナロール、ベンジルアルコール、チグリン酸のエステル類、ジャスミンラクトン、ワニリン、 γ -デカラクトンである (Kaiser, R., 1993)。

夜のフウランを目を閉じて嗅ぐと、かなりトロピカルなイメージがある。フランス人パフューマーの表現を借りるとバタークッキーの香りという。少し違うかなと思うがそのつもりで嗅ぐと、そのようにも感じられる。フランスと日本ではバタークッキーの香りも違うから、多少の表現の違いはあってもよいだろう。



富貴蘭 ‘猩々’

美しい花色や特別な形や斑入りの葉を備えた園芸的な銘品は珍重され富貴蘭と呼ばれる。東京池袋のデパートで1200万円の値札の富貴蘭にお目にかかったことがある。最初は数字の見間違いかと思ったが、すぐに自分の鑑賞眼の貧弱さによることに気づいた。普通のフウランは小さな株が1000円から2000円位で買えるし、栽培も容易なので、お好きな方は試されてはいかがだろうか。



アングレクム セスキペダレ

2 アングレクム セスキペダレ
(*Angraecum sesquipedale*)
—30 cmの長い距を持つラン

マダガスカル東部に自生する着生ラン。冬から春のラン展ではよく見かける。蠟細工のようなやや透明感のある白色の花が咲く。この種はアングレクム属の中でも蜜を先端にためる距の最も長いのが特徴である。実際に測ってみると30 cm程度のものが多い。種名の sesquipedale は45 cmを意味するので若干誇張されている。テッポウユリ様の甘い香りを放つ香りの成分はメチルベンゾエート、ベンジルアルコール、フェニルエチルアルコール、β-イオノン、イソヴァレルアルデヒド、ベンツアルデヒドである (Kaiser, R., 1993)。

距の長い花の形態からして、夜に香りを変化させるのは明らかであるが、暗所に移して香りの変化を観察してみても、私の鼻では明確ではなかった。ラン展の香り審査員は皆、この花の夜の香りに関心を持っている。ニューヨークのラン展とバンクーバーの世界ラン会議の折に前日から段ボールに入れて夜の香りを嗅ぎたいと待ち構えていたが、残念ながら香りの変化は嗅ぎ分けられなかった。東京ドームの世界ラン展の審査員のひとりが繰り返される失敗談を耳にして、夜間、浴槽にお湯を張った風呂場に鉢を持ち込んだ。しばらくすると溢れるような香りがいっぱいに拡がった、という嬉しい報告を聞いた。

た。これは、原産地マダガスカルの夜の暗闇と温度、湿度に少しでも近い条件を整えた興味ある試みだった。

ダーウィンは、開花したこの花の長い距を考察して、このランが花の蜜を吸う長さ10~11インチの口吻を持つ夜行性のスズメガによって交配されると予言した。それから40年後12インチの口吻を持つスズメガが実際に発見された。その蛾はキサントパン・モルガニ・プレディクタ (*Xanthopan morgani praedicta*) と名づけられた。種名の praedicta は予言された、を意味する。東京ドームの世界ラン展で標本が展示されたことがある。

3 イエライシヤン
(夜来香 *Perglaria odoratissima* Sm.)
— 夜は幽玄な香りが加わる

インドからベトナムが原産。ガガイモ科に属し、対生する2枚の葉の付け根から1本の花の茎が垂れて伸び、その先端から房状に薄黄色の2 cmほどのサツマイモに似た花をつける。神代植物公園の鳥居恒夫氏が1970年にタイに行き、バンコクのサンデーマーケットの露店で夜来香を求め、持ち帰って育てたものが、1985年になって咲いた。



イエライシヤン 撮影：蓬田勝之

神代植物公園で開園時間中に花の香りを嗅いだときは、バラとフリージア様の香りに、かすかにジンジャー根の香りが混じっていた。昼もよく香るなと思った。園長に頼みこんで園内に入れてもらった夜は、香りは強まり、青くささと沈香様の幽玄な香りが加わってきていた。

後年、訪れたこの公園では温室の睡蓮の池のそばに植えられていたが、あまり元気がよいとはいえなかった。ハワイのオアフ島の大学附属植物園で見かけたイエライシヤンはジリジリとした夏の強い日照のもとでたくさんの花をつけていた。暑い気候が好きなのだ。

蓬田勝之氏の中国杭州市芳村の栽培農家における調査によると、花の全体的な香りの印象は、ローズ様、バイオレット、パウダリーノートが主香調で、リーフィングリーン、シトラス、カンファーなどが加味された独特な香気と報告されている。全体の香気発散量は、夜7時ころより多くなり始めて、深夜から夜明け前に最も多くなる傾向があった（蓬田、1997）。ここで収穫した花は市場に出されるという。

4 チューベローズ (月下香 *Polianthes tuberosa* L.) 一心感わす官能的な香り

ヒガンバナ科で、メキシコ、中米の原産、かつてはフランスや台湾で香料用に栽培されていたが、現在はコスト高のためインドに移っている。直径2~3cm、長さ約5cmの筒型の白い花をつける。日本ではまれに町の花屋でも切り花として見かける。房総あたりで栽培されているらしい。

ラクトン様の華やかな深い甘さのある香りは官能的で妖艶。夕方から香りがどんどん強まる。ジャスミンやオレンジフラワーも官能的であるが、この花には及ばない。数多くの香水の中に巧みに使われ、その効果を発揮している。

チューベローズには各地に言い伝えが残っている。イタリアでは、若い女性がチューベローズの咲く夜の庭を散策するのを禁じていた。それは宵闇に漂うこの花の官能的な香りに心を感わされ、若い男性の誘惑にあらがうことができないからであるという。英国のヴィクトリア王朝の花言葉は“危険な悦び”と“艶めかしさ”とある。また、バリ島では、初夜を迎える部屋にはこの花が飾られた。

夜、香りを強めることは分析的にも確かめられていて、主要な香気成分のメチルアンスラニレート、ジャスミンラクトン、 δ -ドデカラクトンが昼間より夜のほうが多くなる（B. D. Mookherjee, et al., 1990）。

チューベローズが開花しながら香りを発散し続けるという性質を利用して、かつては、つぼみを動植物油脂の上に置き香気成分を吸着させる製造方法（アンフルラージュ法）が行われていた。以前、友人にやっと咲いたので来ないかと誘われたことがあった。夜に香る花の例にもれず白い花は夜目にも浮き上がるように見え、蒸し暑さの残る夜気の中、あたりにはむせかえるような強い香りが拡がっていた。家に帰り、いただいた半開きのつぼみをひとつ、水を少し入れた小皿にのせてテーブルの上に置いておいたところ、翌朝、小皿の横においたハンドタオルにはほのかな花の香りが移っているのに、この花の香りの特性を実感することができた。



チューベローズ

球根を植えたところ発芽した葉は光沢のある緑で、現在も順調に伸びている。積算の温度が多くなると花をつけないという。今年の高温暖傾向が続けば私のチューベローズも夏の終わりには芳しい香りを放ってくれることだろう。楽しみだ。

李香蘭の歌った恋の歌「イエライシヤン」は控えめな香りの夜来香でなくて、妖艶で官能的な月下香に違いないと思う。イエライシヤンは中国では夜陰に強い香りを放つ花の総称のようである。